

清月吟詠句集

二〇一四年版

高原秋の色

木村宏一

目次

高原秋の色	木村宏一	1
向日葵	石川順一	9
寒満月	橋本幹夫	17
日光黄菅	足立山溪	25
晩夏光	池下よし子	33
星祭	山口美琴	41
後の月	清水恵山	49
春の海	筒井省司	57
夏来る	田村公平	65
春の雲	渡邊春生	73
盆の月	野田ゆたか	81
あとがき		89



木村宏一

下
萌
ゆる
気
の
溢
れ
来
る
一
日
か
な

儂
さ
を
少
し
と
ど
め
て
春
の
雪

揺
れ
る
度
花
立
ち
上
る
雪
柳

砂
利
踏
め
ば
心
研
が
れ
て
幣
辛
夷

小
手
毬
の
白
ま
る
ま
る
と
右
ひ
だ
り

木村宏一

燃ゆるかに霧島躑躅古木かな
野草園香り漂う薄暑かな
あるなしの風つかまえて藤の花
藻刈終え池ひろびろと雲流がる
ひと漕ぎに光る業ありあめんぼう

木村宏一

代を搔くビルの谷間の日曜日
翡翠の目の鋭さに威厳あり
すつきりと朝一番の酔芙蓉
登高や明石大橋遙かにす
宙さぐる朝顔の蔓道半ば

木村宏一

廻り来る月日のありて彼岸花
虚しさに泥靴蹴上げ草の露
鉢植ゑの竜胆届く文添えて
夢路の絵愛でて眺める十三夜
一葉ごと色づく桜紅葉かな

木村宏一

片時雨北山杉の道半ば
参拝は老若男女大根焚
愛犬の主待つ声や年の暮
猪鍋や猟自慢より始まりぬ
藁を打つ野外教室注連を結ふ

木村宏一

五感まで研ぎ澄まされて寒の月
幸せが一目膨らみ日脚伸
山眠る微かに滝の寝息かな
乾杯の笑顔弾けて今朝の春

木村宏一

向日葵

石川順一



石川
順一

階段と同じ高さの野梅かな
パソコンの設定進む春日かな
時折はカメラマンなど花筏
四人もの来訪者あり春が逝く
徹夜して鐘良く響く薄暑かな

石川
順一

鉄線花白と紫なりしかな
風が吹き柿若葉裏見せて居る
鰻井や肝吸付けて貰ひけり
青嵐書き損じたる文字一つ
丘陵を昇降四葩と写真撮る

石川順一

午後からは半曇にて梅雨晴間
熊蟬が竹の構築物に来る
密生の葉に同化して青き柿
虫刺され跡も無いのに痒みかな
透明な花瓶コスモス挿されけり

石川順一

川底の様な地帯に竹の春
林檎食べ独り仮眠につきにけり
大ききの違ひありすぎ自家蜜柑
レール越え秋声東方より聞こゆ
風邪気味の我に時間は伸び縮み

石川順一

布団干す前にヴェランダ拭かれ居り
寒菊の挿され水吸ふ早さかな
バスの中次々変る雪の山
霜焼が一進一退繰り返す

石川順一

寒
滿
月

橋
本
幹
夫



橋本幹夫

末黒野や末広がり阿蘇の山
一発の弾丸余し獵名残
刺青のやから法度の会陽かな
春場所や小兵力士の猫だまし
吠子や訛飛び交ふ播磨灘

橋本幹夫

多羅の芽や煌めく雨後の射爆場
歳時記の葉の緩し目借時
里山の朝の閑かさ竹の秋
秀衡を訪ねて一人静かな
母の日の一番星に手を合はす

橋本幹夫

稚児舞のはしやぎて神田祭かな
貝に耳澄ませば里の祭笛
五月雨や涙はいづれ乾くもの
一雨の欲しき朝顔市の路地
山牛蒡咲いて聳ゆる磐梯山

橋本幹夫

緑雨降るバツキングムの衛兵に
マンゴーや摩文仁の海が見える丘
御巢鷹の尾根さんざめく秋暑し
包丁の音は垂直新豆腐
旅支度済ませて安堵小望月

橋本幹夫

洋上に秋分の日の旭日旗
狛犬の阿の口寂し秋の風
御会式や金の纏の町火消
騎馬武者も曳かれて時代祭かな
五倍子とるや蔵王お釜はエメラルド

橋本幹夫

九冬の初めの一步踏む朝
炎立つ鞆祭の剣かな
銀杏散る頃に学徒は出陣す
野营地も暮て車座桜鍋
一刀に冬至南瓜を両断す

橋本幹夫

日光黄菅

足立山溪

鎮魂の錨に錆や冴返る
桜散る家康公のしかみ像
雲低く野焼の煙風呼びぬ
花咲くや八丁味噌の蔵通り
芽柳や呼び声大き朝市女

足立山溪



足立山溪

夕燕雨戸を少し開けて待つ
奈良井過ぎ九十九折なり青葉風
門前に綿菓子買ふや街薄暑
勝手口開ければ柚の花匂ふ
校庭の水搔く子等や梅雨晴間

足立山溪

後退を告げる警笛梅雨しとど
下閤や家康公の産湯井戸
滝しぶき浴びてポーズの女学生
夕焼や色の褪せたる時刻表
城跡の標の石や赤とんぼ

足立山溪

虫の音や夜半の雨戸を少し開け
きはやかに落暉に映ゆる七竈
雄叫びて赤白帽の運動会
分校の松茸飯や父母の会
団栗の両のポケットトより零る

足立山溪

時鳥草庭に小流れ引く医院
独り居の荘の天窓十三夜
日に映えて唐松落葉煌めきぬ
石多き苔むす庭や石露の花
磴千の表参道落葉舞ふ

足立山溪

枝垂れたる庭の要の木に冬芽
雪搔て門辺に子等を待ちにけり
湖に鴨着水の音たてぬ
どぶろくや白川郷の夜のふけて
鍋釜の出しつ放しや女正月

足立山溪

晩夏光

池下よし子



池下よし子

御手洗の竜の口より春の水
鷺娘狂ふがごとく春の雪
孫去んでシャッター下ろす月朧
抜道の寂と声なし竹の秋
石臼のまはる店先新茶の香

池下よし子

ゴンドラの遠見に白き滝の筋
新婚の二階住まひや桐の花
奥琵琶の便り久しき麦の秋
青葡萄いつしか過ぎし反抗期
夏大根辛味きりりと二八蕎麦

池下よし子

雲はらひ夏満月の大いなる
郷愁や祭囃子の鉦の音
盆提灯嫁して家紋を覚えけり
とこしへに若き遺影や蓮の花
中天の星を払ひて盆の月

池下よし子

秋日傘閉じて開きて京の路地
満月の湖渡りゆく旅寝かな
近江路や湖までつづく豊の秋
枝豆や夫に好みの茹で加減
秋興やひよいと乗りたる遊覧船

池下よし子

水澄みて四条大橋阿国の像
玉砂利に婚と行き合ふ七五三
偲ぶとは語らふことよ露の月
墓石に夢と一文宇山眠る
忘年や街一望の予約席

池下よし子

少年のいつしか壮年去年今年
皇后の手向けたまひし水仙花
たまさかは道に逸れたし冬堇
つつんと満天星紅の冬芽かな
グランドの球児整列日脚伸ぶ

池下よし子

星 祭

山口美琴



山口美琴

安らぎのランチに憩ふ春メニュー
露の臺我一番と頭出し
春霜や本読む声のやはらかき
薬膳の一品なりし蜆汁
束の間の青空消えし春時雨

山口美琴

探梅や記憶にありし一軒家
黄水仙風に応へて右ひだり
花冷や母の遺品の紬織
雨も良し散るも良しとす花見かな
紫木蓮想ひかなわぬ裏おもて

山口美琴

手遊びの八十八夜歌ひ継ぐ
町おこし田んぼアートの田植かな
空映す所もなく青田なる
立ち上がる雲の白さや梅雨晴間
甘藷植う体験学習紅白帽

山口美琴

トマト畑日毎に深む赤き色
悲しきや大人になれぬ茗荷の子
法師蝉けふの命を全うす
雨去りて演奏再開秋の虫
二日月無いものねだる幼かな

山口美琴

沙汰の無き妹も仰ぐか十五夜を
御遷宮結の輪詠みし芭蕉翁
病棟のここは三階小鳥来る
幾重にも山重なりて秋の色
一筋のあかね雲あり冬の暮

山口美琴

白菜に天の恵みの重さかな
子らの声無き校庭の冬木かな
白銀の峰染めゆくや冬夕日
人日や一両電車満員に

山口美琴

後の月

清水恵山



清水恵山

寒明の空より雀こぼれ落つ
早春の陽の柔かく肩包む
落ちてなほ姿とどめて藪椿
谷地坊主楚々と並びて水芭蕉
花冷えとなりゆく町や雨模様

清水恵山

深川の江戸の名残の浅蜷飯
減反の田に菜の花の咲き満る
菖蒲湯や手を抜いてやる指相撲
水鏡雲を浮かべて田植待つ
祭終へ静かな里に戻りけり

清水恵山

樟脳の匂ひ何時まで更衣
一村の静まり返る緑雨かな
頬撫でる風の湿りや梅雨に入る
早苗響やまづ農機具へ神酒供へ
噴水の止れば一瞬みな黙す

清水恵山

玫瑰や白波尖るオホーツク
故郷の径懐かしき墓参かな
本山の解夏の梵鐘鳴り渡る
嫌煙の煙草の花の稚けなし
トンネルを抜けて母郷や盆の月

清水恵山

立待や黄色い月が梢から
阿寒富士毳藻の湖の秋深し
我が影と連れだち帰る月の道
えびづるや法の裏山鳩の鳴く
畦道を歩けば浮塵子弾け散る

清水恵山

彩雲や静かに走る後の月
鷹匠の眼優しく声厳し
道場へ集ふ僧侶や冬安居
恙無く老いて二人や晦日蕎麦
注連貫ふ門に元気な子等の声

清水恵山

春の海

筒井省司



筒井省司

爺婆にバレンタインの日のありて
青空へ飛び立つように辛夷咲く
空を染め散って地を染め花吹雪
花の冷え出かける前の服選び
塀際に妖しき香り沈丁花

筒井省司

沈丁の香に彷徨いし夕べかな

川 跨 ぎ 横 一 線 に 鯉 幟

雨に濡れやっど紫陽花らしくなり

一 休 み 又 一 休 み 青 葉 山

朝顔の明日咲く数を数えけり

登りつめ花火爆けて残る闇

長雨や今日も休業万歩計

妻を待つ院内混みし半夏生

一斉に雀飛び立つ刈田かな

出ぬ月にもう一杯と月見酒

名月や団子作りし母偲ぶ
高塀を越えて木犀香りをり
孫からの絵手紙届く敬老日
遠目にも赤さ一際烏瓜
雨の来る予報も外れ秋旱

筒井省司

起きたての熱きコーヒー冬に入る
冬帽子そつと手を当て会釈する
冬夕日ジャングルジムの子等照らし
ラーメンを湯気ごと啜る寒の入
着ぶくれて信号を待つ児童かな

筒井省司

太陽の恵みを包む干蒲団
水仙の香り求めて歩をのばす
元旦や少しの酒に餅二つ
七種に足らざる粥も胃をいやす
焦げ餅をかじった昔どんど焼き

筒井省司

夏来る

田村公平



田村公平

花写真刺したる苗木春を待つ
球審の声ストライク風光る
鞭入れて逃げ切る駿馬風光る
開け放つ庭が棧敷や雛の宿
教会と寺を隔てる竹の秋

田村公平

地獄行き湯けむり橋に春惜しむ
ガラス窓叩く平戸の花吹雪
結び目の甘き粽や一人つ子
向かひ風吸つては泳ぐ鯉幟
故郷の山は膨らみ若葉風

田村公平

夏襟を立てて乗込む練習船
花びらに寄り添う名札花菖蒲
紫陽花や紫紺の濃さを競いたる
落ち際の水膨らみし大瀑布
実況のラジオ体操朝涼し

田村公平

ジェット機が飛び出してくる雲の峰
灼石を掻き上げ線路工夫かな
早鞆の連れ潮を待つ良夜かな
天の川この世に似たる星いくつ
走つても走る速さに鬼やんま

田村公平

愁思ふと語りたくなる漁の日々
木の葉めく船を支える鱈場かな
団欒の北窓叩く冬將軍
新旧の写真見比べ木の葉髪
ブイ傾げ寒満月の潮騒ぐ

田村公平

時雨来て船笛長き壇ノ浦
身の丈のくらし楽しみ年守る
風穴が開いてどんどの火が上がる
船霊に柏手を打ち漁始
鍵束を探る指先悴める

田村公平

春の雲

渡邊春生



渡邊春生

焼跡の灰黒ぐろと露の臺
石垣の高きに梅の咲きにけり
風光る野面積みなる峡の畑
関取の雄姿間近や鬼やらひ
春帽子被り佳きことありさうな

渡邊春生

花種を蒔く慰霊碑の日だまりに
老桜の七百年を咲きほこる
遠足の子の声高し登呂遺跡
八重桜咲き遅れたる川堤
補陀落を目指す岬や雲の峰

渡邊春生

足摺の卯波逆巻く巖かな
荒梅雨や青木ヶ原の果てしなく
神籬に炎天の富士遙拝す
砂蹴つて追いつ追はれつ裸の子
釘打てば曲つてばかり油照

渡邊春生

高々と踊櫓の組み上がる
合掌の力籠めたる敗戦日
暴れ川暴れし後の蟬時雨
台秤昔も今も桃を売る
電車バス乗り継ぎ来たり赤のまま

渡邊春生

どかどかとバス降りて来る林檎狩
菊人形少年隊は銃構へ
俳人に帰り花あり富士のあり
着膨れて杵つく音を聞いてをり
古井戸の蓋のひび割れ藪柑子

渡邊春生

枯れ深む藺草は風に纏れけり
光り合ふ引佐細江のゆりかもめ
意地張つて顔をなさざる福笑
居眠りをしばらくしたり初湯殿
産土の森の暗がり淑気満つ

渡邊春生

盆の月

野田ゆたか



野田ゆたか

殉教の裔生くる世に絵踏なく
潮騒の絶ゆ間なき浜若布干す
防風や肴にしてはほろ苦し
貝寄風の波逆立てる河口かな
背ナに聞く詣で帰りの御忌の鐘

野田ゆたか

咲く一気散るも一気の桜かな
街騒の遠き草庵鳥交る
風見鶏料峭の風ほしいまま
何釣るか浦島草の竿伸ばし
光背に夕日重ねて練供養

野田ゆたか

あをあをと名草醜草夏に入る
疲鶉の手綱捌きて叱咤せる
腰回り少し細めて夏ズボン
独り身に夏大根の辛さかな
花魁草咲ける順路に脂粉の香

野田ゆたか

驟雨避く軒端に開く破れ傘
機町の名残りを今に棉の花
乳足りて軽やかな息星月夜
借景にとどめ置きたき今日の月
注ぎ足してちびりちびりと月見酒

野田ゆたか

暮れてより虫の浄土となりし庵
朝の日に笑むごと石榴弾けたる
偲ばるる事のみ多き十三夜
そぞろ歩の黄葉且散る御堂筋
計画のいらぬ余生の着ぶくれて

野田ゆたか

一戸づつ明り消えよゆく除夜の閑
ルミナリエてふ華やぎも師走かな
添ふ影の雪女郎めき町更くる

書初の筆を正して自戒の句

四日早や常の暮らしに嫁が君

野田ゆたか

あとがき

この句集はインターネット俳句会・清月に平成二五年において佳句を残されました皆様に私の句を加えて編集作成したものです。

PDF合同句集のインターネットアップは、昨年に継ぐ二度目ですが来年もアップ出来ますようにして参りたいと思います。

「俳句は生きた証」とも言われます。ご参加者の御句を拝見して頂くとご参加者の生活のすばらしさが見えて参ります。

またどの句にもなるほどと感心させられます。

俳句は、発表後すぐに消えてゆく句が多いのですが、この句集の様に一つのものにまとめると、一句一句が世に残る輝いた作品に見えて参ります。

ご参加者皆様におかれましてはこの句集を印字のうえ和綴じにして愛蔵書の一つに加えていただけましたら幸いです。

平成二六年五月吉日

大阪にて 野田ゆたか

合同句集参加者ご芳名

	ご芳名	在所	入会年月
1	木村 宏一	大阪	平 15.07
2	石川 順一	愛知	平 20.01
3	橋本 幹夫	岡山	平 20.06
4	足立 山溪	愛知	平 21.09
5	池下よし子	吹田	平 21.11
6	山口 美琴	三重	平 22.01
7	清水 恵山	千葉	平 22.07
8	筒井 省司	千葉	平 23.07
9	田村 公平	千葉	平 24.10
10	渡邊 春生	静岡	平 25.01
11	野田ゆたか	大阪	

発行
2014年6月1日

発行人
野田ゆたか

発行所
大阪清月庵
(枚方市)

清月俳句会のホームページ
<https://haiku575.info/seigetukai/home/home.htm>